

曲 り 角

昭和 58 年 11 月 第 2 号

* 身体活動と知的活動 *

関西外国語大学 末 利 博

戦後、間もない頃（昭和 24 年）に後藤岩男氏執筆による“体育の心理”という本が金子書房から出版された。

筆者は大学で後藤氏の御指導をうけたので同氏は筆者にとっては恩師である。ゲシュタルト心理学の立場に立った先生の講義は印象深いものであった。このような関係もあり、筆者は先生の戦争直後の著作である本書を大きな期待をもって何回も熟読した。筆者の書棚の片すみに今もなお健在な同書は、色あせてはいるがその巻末には昭和 24 年、25 年、27 年と 3 回読了したという日付がつけられている。後藤先生は心理学者であるが学生の頃サッカーの選手であり、スポーツ経験の豊かな方であったので、同書の内容は先生のスポーツ体験に支えられ、体育専門のものにもわかり易く共感できることが多い。ところがその第 4 章の“体育運動と自我”の記述内容が体育指導者やスポーツマンにとって大変ショッキングなものであり、体育関係者の間で当時議論をまきおこしたことが今も記憶に残っている。その所説の概要点を紹介すると次の如くである。「体育運動は主として外の場の活動である。いいかえると外の場が非常に分化し、異質化してゆくことに外ならない。かかる異質化とは、必然的に内の場の等質化を必要とする。内の場も異質化しつつありな

がら外の場もまた異質化することなどは、いかなる名手もこれをよくすることはできない。このような理由で永い間体育運動のみに専念しているものは、鋭敏な感性を失ってしまい勝ちである。その代り小節にこだわらないいわゆる肚の太い剛直な性格になりやすい。…スポーツマンの性格を調査してみても体育運動家の体験を聞いてみてもこの理論に証明を与えるような有力な事実が多い。体育運動家は概して犀利な思索や強靱な思考が不得手であり、考えが大ざっぱである。

それは多年、外の場の活動に専従し、内の場の活動に機会を与えることが少なかったからである。…運動しないで本ばかり読んでいる子どもは、内の場の活動に機会を多く与えている子どもであり、その反対に勉強しないで運動ばかりしている子どもは外の場の分化に多くの機会を与えている子どもである。前者は思索型の人間になり、後者は行動型の人間になり易い。このような性格型の分れは小学校 4・5 年生頃から現われるが、その後の人生に及ぼす影響は非常に大きい」。後藤氏は昭和 14 年に某専門学校の運動競技の選手 70 人に次のような質問紙調査をされた。

1) あなたはいつ頃から運動をするのがすきになったか。2) あなたが主として行っている運動は何か。3) あなたが熱心に運動するよう

運動開始時期と性格の変化意識

運動開始の時期	性格の変化を認めたもの	性格の変化を認めないもの
小学校及び中学校1年	6%	46%
中学校3年以上	37%	10%

になってから、あなたの性格や気質にどこか変化がおこったか。4)あなたは数学や物理学、哲学などの複雑な問題をこまかく根気よく考えることが好きか。5)あなたは長時間じっと物事を考えたり、読書したりするのが好きか。6)あなたが運動を熱心にやるようになってから、あなたの性格に4)5)のようなところが少なくなったと思うか。この結果をまとめたのが上の表である。同表は中学3年以上で運動を始めたものに性格の変化を意識したものの多いことを示している。

これについて後藤氏は次の如く解釈されている。「少年時代に運動を開始したものは、運動競技の影響による内の場の分化がおくれているが、本人はそれに気がつかない。これに反し、青年時代に運動を開始したものは、既に一度思索的訓練を経ているので、一度は内の場の異質化が既に行なわれているのに、今になって運動競技の影響で内の場の等質化

が進行するので、これが性格の変化として意識されると思われる」。以上後藤氏による運動競技の思考抑制論の概要である。われわれの日常経験でも散歩しながらの読書は可能であるが、読書の内容が難解になると歩行は停止し、読書に注意を集中せざるを得なくなる。初歩のドライバーには助手席の人と会話しながらの運転が困難である。会話に耳をかたむけると運転動作がお留守になる。これは読書・会話（言語的思考）と歩行・運転（身体運動）の相制的関係にあることを示すものといえる。スポーツの場でもバレーボールや野球におけるベンチコーチや監督とプレイヤーの関係は作戦（思考）とプレー（運動）が分業になっており、思考はコーチや監督の専業になっている。これも思考と運動の相制関係によるものであろう。ところが去る10月10日の体育の日の朝日新聞の天声人語に散策と思考についての記述が掲載されていた。そこでは、わが国や西欧の有名な詩人や思索家達が散策を愛し、散策の中ですばらしい発想のひらめきを得たことが述べられていた。身体活動による教育としての体育は子ども達の知的発達に、また、スポーツ活動は大人の思考活動にどのようにかわるのであろうか。体育心理学分会のわれわれのこの面の研究が期待されるところである。

* 北米スポーツ心理学会の動向 *

九州大学 徳 永 幹 雄

正式には北米スポーツ・身体活動の心理学会（North American Society for Psychology of Sport and Physical Activity）のことである。この学会のことは日本ではあまり知られていないので、その動向の一端を紹介してみたい。

通称ナスパ（NASPSPA）と呼ばれていると

の学会は1966年に発足、1978年にAAHPERから独立し年1回の総会が行われている。1983年5月現在、416名の会員を持ち、各国からの参加がある。当然ながら合衆国が最も多く385名、カナダ16名、オーストラリア8、イングランド3、ブラジル、日本、メキシコ、エジプト各1名である。スポーツ心理学（212名）、

運動の学習とコントロール(120名)、運動の発達(44名)の3分野から構成され、学会発表などはそれぞれの会場に分れて行われている。この学会の機関紙としてJournal of Sport Psychology, Journal of Motor Behavior, Motor Skill: Theory into Practiceが発刊され、日本からも購入は可能である。ちなみに年会費は20 USドルである。

1983年の学会は5月28日～30日までミシガン州立大学で開催され、3つのキーノート・スピーチ、5つの招待シンポジウム、2つの自主シンポジウム、147の研究発表(運動の発達25、運動の学習とコントロール53、スポーツ心理学69)が行われ、その盛大さがわかる。現会長はイリノイ大学のGlyn C. Robertsで確か年令は41才である。この学会の会長は歴代若く、私が1982年4月から10ヶ月間、留学中に世話になった同じくイリノイ大学のRainer Martensは33才で会長になっていた。

私の海外での学会は1981年、オタワ(カナダ)での国際スポーツ心理学会と1982年のメリーランド大学で開かれたこの学会が始めてであった。これらの学会へ参加した時の感想や帰国後送られてくる会報からスポーツ心理学部門における1つの動向を知ることができた。それは我国の体育心理学専門分科会の発表内容と異なり、競技者の心理的能力などに関する競技心理の研究が非常に進んでいることである。このことは、この学会が1981～82年にかけて、スポーツ心理学者の責任、資格、モラル、評価技術など9つの原則を示した「スポーツ心理学のコンサルタントによるサービス規定に関する倫理基準」と心理テストの目的、限界、使用者の資格、テストの妥当性、信頼性など6つの指針を述べた「スポーツやその他の身体活動場面での心理テストに関するガイドライン」を確立していることから推測できる。

たとえば、私が接したスポーツ心理学者の

多くは上はオリンピックの選手やプロ選手、下は大学や高校の選手に対してスポーツ心理学者としての立場から競技者やコーチと接触していた。そのことを反映してか学会の発表内容もリラクセーションやイメージ・トレーニングなどによる競技者を対象とした競技心理に関するものが多い。さらに、競技不安などのスポーツ場面での各種の心理テストが開発され、それを管理・指導するスポーツ心理学者の発言が重要な役割を演じているとのことであった。すでに、スポーツ・コンサルタントを職業とする人々やリラクセーションなどのオーディオ・カセットテープなども作成されている。

この学会が急増する臨床スポーツ心理学者に対して一定のルールを設定しなければならない現実を見出し、我国におけるこの分野の遅れを痛感しながら帰国した。ところが、その後、送られてきた会報を見ると、このことはさらに発展している。それは、プロ的活動にまで発展している臨床スポーツ心理学者の増加が、学会本来の目的や機能をおびやかし始めたということである。学会の目的や機能を拡大すべきか否かをめぐって、実行委員会の詳細な見解が記載され、会員への問題提起がなされている。以上のような増加する臨床スポーツ心理学者をめぐる問題が、この学会の最大の動向であろう。

さて、我国ではどうであろうか。この学会は日本スポーツ心理学会に相当するものである。しかし、近年、体育学会における体育心理部門の低調振りは、いったいどうした現象なのだろうか、人々の運動への関心が高まる一方で、心理部門の停滞傾向は私だけが感じることなのだろうか、体育心理専門分科会の進むべき課題や今日の低調の原因を考えなければならない。人々の運動処方に対してこの分科会はどれだけ貢献してきただろうか、競技者に対する教育的指導にメスを入れるため

にも臨床スポーツ心理学の発展もまた重要な課題である。

最後に、1984年のこの学会は6月19日～26

日、オレゴン大学で開催されるオリンピック科学会議の1つとして行われる。

* 北海道における体育心理学研究 *

札幌大学 倉 島 武 徳

北海道体育学会は昭和40年に日本体育学会北海道支部でスタートを切ったのであるが、10年を経過したところで日本体育学会の支部とは独立して、北海道体育学会を設立したものである。構成員の内容は、大半が日本体育学会員と重複しているが、昭和50年からは北海道体育学会として活動を開始している。

北海道における体育心理学研究の実績および活動状況は、他地区に比して極めて低調といわなければならないと思われる。その理由の第1は研究者が少ないこと、第2はこれが起因となって、研究実績も限られた範囲しかカバーできていないことがあげられる。従って組織だった研究、あるいは研究会などの実績を見ることがなかったといっても過言ではない。

現在、北海道体育学会は190余名の会員を擁しているが、このうち体育心理学の研究者は、わずかに数名であり、例えば体育心理学分野の実績を残している人であっても、専門領域は別のところにあるというのが実情である。

それでは昭和40年からの体育心理学研究の動向について、研究内容から分類してみると表1のようになる。

以上のように過去17年間における体育心理学研究は38編にわたるが、平均的には1年間に2編余となっている。内容も学習・適応・発達・指導の4分野10項目であり、領域の面で偏りがみられる。また、これらの4分野のうちでも学習・発達に研究が集中しているのが目立っている。さらに、昭和57年度の北海道体育学会大会においては「幼児の体育・健

康に関する諸問題」というテーマでシンポジウムも行なわれたが、ここでもまた発達発達という分野となっている。ここでは過去の実績の総まとめ的な意味も含めて一定の成果を得たが、これを機会に、他領域への積極的な取り組みをすべきであろう。

北海道は広域性の故に、少ない研究者の分散、さらに専門領域の相違などが障害となり、共同研究や研究会などの機会を得ることが、他地区よりも困難な状態にある。従って、個人研究が多くなり、研究の規模や研究の突込み方にも一定の限界を感じるものが多い。ましてや実験を伴う場合、器械の購入すらままならないのが実情である。このように北海道の体育心理学研究は、他地区に比して低調であると思われるが、上述のような悪条件下に

表1 北海道関係者体育心理学研究発表分類

発表場所 分類	北海道 体育学研究	日本 体育学会
学習 13 34.2%	反 応 4	反 応 2
	知 覚 4	知 覚 1
	過 程 2	
適応 7 18.4%	性 格 4	
	適 性 2	適 性 1
発達 17 44.7%	運 動 2	運 動 3
	身 体 1	身 体 4
	相互関係 1	相互関係 4
指導 1 2.6%		社 会 2
		療 法 ※ 1
計	20	18

※ 体育学研究掲載

における研究活動であることを記しておきたい。

今後の課題としては、まず第1に研究者を増やすこと、そのためには大学のみに研究者を求めることなく、広く幼稚園・小学校・中学校・高校に人材を開拓する必要がある。現実に中学校・高校には大学院修了の人達が教鞭をとっている。そういう人達も含めて、体育心理学に興味を持っている人を可能な限り発掘し、仲間に入ってもらうことが大切であろう。第2に、このような人達を発掘できれば、共同研究も可能になろうし、研究領域の拡大も望めようし、さらに研究会も頻繁に開催できるようになるだろう。第3は現存の

研究者の研究活動の活性化をはからなければならない。現在のような限定された領域から脱皮し、領域の拡大をねらうべきである。

昨今の社会的要請からも、深い専門的知識と共に、学際的なとりまとめのできる研究者の出現が望まれる。また、専門的研究の実績を現場で実践できるまでに組み立てる意味からも、研究者の研究のための研究は慎まなければならないだろう。

「曲り角」における他地区の活発な動向を見て、北海道地区としても早急に体育心理学研究の同志の組織化をはかる必要性をつくづく感じているところである。

* 関西支部体育心理学専門分科会例会記 *

怪我と性格特徴について

大阪府立茨木工業高等学校 野 阪 栄 一

今日、社会のみならず学校においても「安全」の重要性が増大している。事故災害発生の原因を人的要因としての精神的側面に注目し、学校運営の中で安全教育に応用したい。

1. U-K検査と怪我

1) 昭和55年度中に怪我をした者の人柄類型分布では、治療3週間以上の重傷群と治療1週間以上をしばしば繰り返す頻発群の中に特に粘着型の出現が多く認められた。

2) 本校で人柄構成の多いものについて類型別に怪我と性格特徴について考察した。粘着型、じっくり型、地道粘り型では適応の遅さ、柔軟性不足といった人柄上の難点が、融通がきかない、テンポを乱される、納得せずに動き出す、咄嗟の変化に対処できない等となって現われると怪我を誘発しそうな環境下ではその大きな誘因になると考えられる。温和型ではスポーツを初めある程度の制約を受けて無理もしなければならぬような場面では気力不足が怪我につながる原因になろう。鈍麻型

では無感動・無関心な面が潜在危険に関知しなかったりすることによって、また敏感型では敏感すぎるが故の混乱してまとまらない状態から始動する行動に選択を誤ったり秩序を欠くことによって、事故や怪我につながる事が予想される。さらに分裂型に共通した作業障害は明らかに事故の原因になろう。自己顕示型では勝気にすぎる・気分が変り易い等の難点が、行動に無理を伴わせたり冷静さを欠くことによってやはり怪我をひき起こす誘因になるものであろう。

3) 上記考察における怪我を誘発するであろう人柄上の難点が精神の不健康時にクローズアップされてくることを踏まえ、精神的健康管理の面から各々の人柄型に応じた指導票を作成し、安全指導に利用した。

2. P-Fスタディと単車の怪我

特に青少年と単車の問題についてはP-Fスタディを用いて調査した。

1) 調査対象

- イ、単車怪我群 昭和55年度中に単車事故により2週間以上の怪我をした者19名
- ロ、単車無怪我群 免許取得歴1年以上で無事故・無違反・無怪我の者17名
- ハ、運動部員群 2・3年生の運動部活動生徒で熱心に活動を続け活躍している者で、かつ単車に興味のない者17名

2) 結果と考察

単車無怪我群は内罰傾向が高く、欲求不満の場面においてその原因を自分の責任に帰し、その反省から自分の努力によって問題を解決しようとする傾向が強かった。これに対して単車怪我群は外罰傾向が高く、欲求不満の原因を他人とか環境の所為にし不満と失望を外

に向け、自責の念に乏しく自我を協調する傾向が強かった。また運動部員群は、やはり外罰傾向の高い集団ではあったが、怪我群がむしろ単なる不平・不満に終始するのに対して、他人やものに向って直接的な攻撃で示すという点で若干様相を異にしていた。

本報告は、本校が日本学校安全会、大阪府教育委員会より学校安全に関する研究指定を受け、昭和55・56年度の2ケ年にわたって進めた実践研究の中から特に怪我と性格特徴について抜粋したものであるが、これらの結果等をもとに本校で行われる安全指導はかなりの成果を上げることができた。(4月22日)

水泳場面における児童の意識変容

—スイミングスクール児童に対するシーズン前後の適応調査

大阪教育大学非常勤 滝 省 治

スイミングスクールに通う小学生362名に水泳シーズン前後に「水への適応」調査を実施した結果である。調査項目は昭和55年度作成の水泳練習の際に生じる不適応感情を中心とする情緒的側面に関する60項目に今回、新たに水泳練習に対する意欲、向上の欲求を表わす10項目を加えた70項目と若干のフェイス部分である。

前後の調査それぞれについて主因子法による分析を行ない、因子構造を比較した。水泳練習の進展した2回目調査時において項目の分化、統合がなされ、より解釈が平易なものとなり、因子寄与率も1回目33%に比べ36%と増加した。解釈可能な8因子について、第1「不適応」、第2「一般的価値観」、第3「喜び」、第4「消極性」、第5「向上心」、第6「劣等感」、第7「疲労感」、第8「競争」因子と命名した。今回は、これら8因子の個人得点を負荷量の高い(0.4以上とした)代表項目の5段階数値尺度上への回答値を集計し求めた後、Tスコアに変換した値とした。

1～6学年別因子得点をもとに児童の発達

的变化をみると、不適応、劣等感、疲労、競争の各因子に有意な差が認められた。水泳環境における不適応感、劣等感は加齢的に減少し同時に積極的な競争意欲も低下している。児童は加齢に伴ない安定した状態で水泳練習を行なえるようになると考えられる。しかし、疲労因子得点は学年進行と共に高くなり、「水泳は疲れるんだ」といった認識が高まるようである。スイミング継続年数別にこれを見ると、継続年数の短かい者ほどシーズン後に疲労得点が増加する傾向が認められる。以上の2点から、技能レベルの向上と共に効率的運動が行なえ、加齢に伴ない疲労感は低下すると考えられるが、「水なれ」の段階からいわゆる「泳ぎ」の練習へとその質及び量の変化、増大がより強く疲労感の増大に影響すると考えられる。

水泳は水中で行なうという他のスポーツに見られない特徴を持っている。そこでは陸の運動では不利とされる身体的条件も有利な条件となるように、水泳に対する意識は、陸で行なう他の多くの運動に対する一般的な意識

と遊離したものであるかもしれない。運動の「好き」から「嫌い」までの3水準と身体充実度を示す体格3水準の2要因分析を各因子について行なった。F7「消極性」因子において運動好嫌、体格のそれぞれの主効果に有意差が認められた。運動好嫌の差は運動嫌いである者ほど水泳練習の場における消極性が強いことを示し、水泳といえども、運動についての一般的な意識から逃れ得ないことが示された。体格の要因では「やせ型」の者ほど消極性が強いことが示され、「寒さ」との関連がうかがえる。水泳場面で最も消極的であるのは運動嫌いのやせ型体型を持つもので、その対極は運動好きのふとり型体型の者であ

体育学習の楽しさに関する研究

—小学校・中学校・高等学校におけるその因子構造

兵庫教育大学 千駄忠至、矢島 弘、岡本純輝
田中則子、角 保宏、佐々木治郎

指導要領が改訂され、運動する楽しさや体育授業の楽しさなどについて、いろいろな視点が論じられてきた。徳永や賀川らは、因子分析法を用いた学習者側からみた体育授業における楽しさを明らかにした。この種の研究は、未だ数少くさらに追研究がなされ「楽しさ」の実態や本質を明らかにする必要があると考える。

今回の報告は、体育学習の楽しさ、各教材における楽しさ、楽しさの評価、体育学習での活用、教師が学習者に対し経験させたい楽しさなど、体育学習の楽しさに関する研究の一部分である。

1. 目的

小学校1年生から高等学校3年生における体育学習の楽しさの因子構造を明らかにすることである。

2. 方法

- 1) 対象・小学校1440名・中学校733名
・高等学校773名

- 2) 調査期間・昭和58年1月～2月

る。

シーズン前後の比較から、スイミングスクールで水泳を集中的に練習することから泳力が向上し、児童はより安定した「水への適応」状態に到り、水泳の喜びの得点も、シーズン前に比べ増加する。この喜び得点を運動の得意・不得意群間で比較すると、シーズン前は「不得意」群は低いが、シーズン後では差がみられなくなり、シーズン前後の群間得点比較では「不得意」群のみ有意な差が認められた。運動を不得意とするような者ほど、こうした集中的水泳練習の機会が望まれるのではなかろうか。(5月27日)

- 3) 調査票・77項目からなる質問紙を作成、

～小学校用及び中学・高等学校用

・各質問項目は5段階評価

- 4) 回答の処理

各学年ごとに77項目における相関係数を求め、その相関行列に対しノーマルバリマックス法による因子分析を行った(固有値1.0以上)。さらに回転後の因子負荷量の高い項目を選び因子の解釈を試みた(0.40以上)

3. 結果および考察

因子分析の結果、各学年ごとに抽出された因子と寄与率は表1のとおりである。全学年を通し、挑戦、達成の因子が抽出された。小学校のみで抽出された因子には、賞讃、指導の工夫、応援、励まし、発散などがある。

各学年において抽出された因子は、徳永や賀川らの研究と共通するものが多かった。しかし、指導の工夫、ゲーム、環境など先行研究にない新たな因子を抽出することができた。

抽出された因子を大別すると、個人内の要

因から感ずる楽しさと個人の外の要因から感ずる楽しさになり、さらに、個人内の要因から感ずる楽しさの中には、多少の苦しみや努力をした結果感じる楽しさと解放的な楽しさがある。特に注目すべきことは、多少の苦しみや努力をした結果感じる楽しさは、高学年

になるほど、その割合は多くなり、解放的な楽しさはその逆の傾向を示すことである。

体育学習における楽しさは、単に欲求の充足だけでなく、学習者、教師、教材、環境などの相互作用によって学習者のひとりひとりがそれぞれを感じとっているものと考えられる。(7月8日)

表1 体育授業における「楽しさ」の因子命名一覧表

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子	第8因子	第9因子	第10因子
小1全	努力・向上 (5.90)	挑戦	賞讃・達成	気軽さ	自由さ	緩和	自発的活動	爽快さ	指導の工夫	励まし
小2全	賞讃・向上 (6.91)	自発的活動	挑戦・環境	気軽さ	達成	自由さ	リズムカルな動き	発散	命名不可能	
小3全	向上・応援 (6.77)	達成	気軽さ	緩和・爽快さ (10.37)	挑戦	ゲーム	承認	優越感		
小4全	賞讃・達成 (12.95)	挑戦・環境	ゲーム	緩和	優越感	学習の基本的欲求充足 (7.50)	自由さ	命名不可能		
小5全	達成 (12.1)	挑戦・爽快さ (6.95)	なごやかさ	指導の工夫	優越感	気軽さ	自由さ	承認・賞讃 (3.95)		
小6全	挑戦・環境 (10.47)	ゲーム・気軽さ (6.02)	主体的活動 (4.79)	達成・爽快さ (7.78)	承認・優越感 (7.97)	なごやかさ	緩和・知的理解 (5.44)			
中男全	達成・緩和 (12.30)	挑戦・主体的活動 (11.92)	自由・気軽さ (6.61)	努力・向上 (6.28)	優越感 (3.74)	ゲーム				
中女全	達成・緩和 (13.92)	挑戦・主体的活動 (9.86)	承認・優越感 (8.86)	ゲーム (5.47)	気軽さ (6.26)	努力・向上 (5.67)				
高男全	達成・爽快さ (10.13)	挑戦・環境 (7.85)	ゲーム (6.40)	気軽さ (3.01)	承認・優越感 (6.26)	リズムカルな動き (2.88)	緩和 (6.18)	なごやかさ (4.45)		
高女全	達成・緩和 (12.06)	挑戦・環境 (11.29)	自由・気軽さ (7.57)	承認・優越感 (9.62)	リズムカルな動き (4.66)	努力・向上 (5.19)				

() 内の数値は、寄与率を示す。

体育の立場からみた身体活動の経験内容とその教育的意義

関西外国語大学 末 利 博

学校体育では戦前の“身体教育”から戦後は“身体活動による教育”へ、そして最近では“身体運動を教育内容とする教育”へとその体育観が動いてきている。とはいえ文部省による学習指導要領では未だ“体育を身体活動による教育”とする立場が固守されている。ところが、この立場では体育の手段は身体活動であることを示しているが目的が明らかでない。その目的は身体活動の性格やそれによる経験内容に依存すると考えるべきであろう。何故なら、教育は経験による意図的な行動の変容であるからである。体育の手段であるスポーツのような身体活動の経験内容とその教育的意義を要約すると次の如くなるであろう。

1) 生理的反応としての経験

大筋活動という刺激はわれわれの有機体に広範囲で複雑な反応をおこさせる。その多くは意識にのぼらないが、生体の機能を活発にし、生体の発達や体力の向上、健康の保持増進に役立て得る可能性をもっている。

2) 運動の遂行と関係の深い感覚・知覚経験

身体運動は感覚や知覚にフィード・フォワードされて遂行され、その過程や結果は感覚・知覚にフィード・バックされてよりベターな運動に仕上げられる。この過程は運動技能の形成過程そのものであり、それはわれわれの日常の動きは勿論、スポーツのスキルの形成に大切な役割をもつものである。

3) 知的活動としての経験

スポーツのような身体活動は知的活動としての記憶や思考なしには不可能であるが、外部環境の変化に注意を集中して反応している運動遂行中は脳の連合野の機能が抑制されているという研究がある。集中的スポーツ練習にはその密度と実施年齢に教育的配慮が必要と思われる。

4) 情意活動としての経験

スポーツ等の活動は情緒・意志に支えられて推進されているので、情緒のコントロールや解放、自己実現にむけてこれを活用できる可能性がある。

5) 社会的活動としての経験

スポーツや運動遊戯はその大部分が濃厚な人間関係の中でおこなわれるものが多い。そこで幼児・児童には勿論、青年や成人においてもこれを好ましい社会的適応に活用できる可能性を持つと思われる。

6) 自然との接触・調和の経験

キャンプ等の野外活動は参加者に自然との接触・調和の経験を与える。この経験の魅力が最近における各種の野外活動ブームの基盤になっていると思われる。この経験はわれわれにころのやすらぎと自然愛護の感情を育ててくれるように思われる。(9月30日)

ボールゲームにおける勝敗の学習について

改訂学習指導要領では、小・中・高等学校を通じて、運動の楽しさを味わいながら運動に親しむ習慣をつけることが主要なねらいとなっている。これは生涯にわたる人間と運動(スポーツ)との関係について理解させるということであろう。

周知のようにカイヨワは、スポーツ競技をアゴンに属する遊びに分類した。この分類によれば、ボールゲームの楽しさの原動力となるものは競争(勝敗)である。したがって、ボールゲームの学習指導においては、ゲームを中心に学習させることが、楽しさを味わわせる指導ということになる。

しかしながら、ゲーム(勝敗)を中心に学習することが楽しいとはいっても、勝敗に対する力点の置き方によっては、勝者万能とか運動嫌いや人間疎外にも陥りかねない。

そこで、ボールゲームにおける勝敗を通して児童・生徒は何を学習し、また何を指導すればよいかなどについて考えてみたい。

1. ボールゲームの特性を認識すること

ボールゲームには、他のスポーツ種目とは異なる一般的特性と数多いボールゲームの持

天理大学 藤 善 尚 憲
つそれぞれの本質的特性がある。この特性をふまえないければ、ボールゲーム本来の「楽しさ」や勝敗の学習に近づくことはできないであろう。

2. 勝敗の学習に対する前提条件

ボールゲームにおいて勝敗を学習するということは、ただ勝った敗けたという結果だけではなく、その過程や内容とともに勝敗の経験を正しく認識させる必要がある。それが技術、ルール、マナーといった自己の能力や社会的態度の涵養に役立つものである。

その勝敗の学習は、競争—協同—勝敗という図式の中で、はじめてボールゲームの本質にせまることができるし、お互いに気持ちよくプレーを楽しむためのルールやマナーを規範として厳守するところにある。

3. 勝敗の学習指導における課題

1) 発達段階に応ずる指導

授業において、ただ教師の目指すカリキュラムを押しつけるのではなく、児童・生徒の内発的動機づけを重視した指導が学習効果を高めることはいうまでもなからう。この内的動機は、個人差・性差も大きいですが、発達段階

による特徴を見逃すことはできない。

とくに勝敗とか競争場面への適応を考えてみると、運動発達と精神発達の両面からおさえる必要があろう。

2) 技術発展段階による指導

勝敗の学習を身につけさせるということは、ゲームを主体にした学習の指導をいかに展開していくかということである。

普通、一般的な学習指導では個人技能、集団技能、ゲームという形がとられる。しかしながら、それぞれの基礎的な技能の練習だけでは、楽しくしかも生きいきとした授業にはなり難い。したがって、それぞれの技術習得の段階で、ゲーム（勝敗）を含めた指導をしていくのが効果的であろう。

3) 技能差に応ずる指導

ボールゲームでは、勝敗を伴うゲームを前提としているから、グループの中での動き（

技術の巧みさ）を通して技能の優劣がはっきりしてくる。この技能差をどのようにカバーするか、また技能の劣者に疎外状況をつくらないようにするにはどうしたらよいだろうか、といった課題解決に直面する。その際、次のことに留意するとよいだろう。

- ① グループ（チーム）づくりを工夫する
- ② 競争状況を多様化する
- ③ ゲームのバリエーションの工夫をする
- ④ 施設・用具の開発と有効利用を考える

ボールゲームの勝敗にかかわる学習の指導は、対象者の内発的動機に依存しながらも、指導者の果たす役割が非常に大きい。そこで、現在までのボールゲーム指導を改めて見直し、ゲーム（勝敗）の生かし方を再考する必要があるように思われる。（11月11日）

* 事務局 だより *

昭和58年度会計報告（S.58.8.18）

於北海道大学

収入の部

前年度よりの繰越金	111182
会費	152500
分科会補助金	0
利息	8740
計	272422

支出の部

通信費	49170
事務費	2040
印刷費	13500
会議費	0
謝礼金	0
計	64710

次年度繰越金 207712

左記の通り、札幌大会専門分科会総会において会計報告が承認されました。尚、分科会補助金は大会終了後に送付されたので59年度会計に組み込みました。

体育心理学会会報

「曲り角」

昭和58年11月30日発行

代表 柏原健三

編集 船越正康

連絡先 〒563 池田市城南3-1-1

大阪教育大学池田分校体育学教室

体育心理学専門分科会事務局

電話 0727(51)8331(内)282